

今を遡ること270年前、16歳の勇猛な若者が敢然と妖怪たちと立ち向かった。
日本屈指の妖怪物語と讃えられる『稲生物怪録』。
その物語に秘められた魅力と、ゆかりの地を訪ね歩く。

妖怪と戦った男の 30日間を辿る旅

稲生物怪録の舞台、
広島県・三次

稲生物怪録の発端のなった
比熊山の山道の道端には、
物語に登場する妖怪のレリ
ーフや八十八の番地蔵が飾
られている。



1枚絵です

15日 トントサココニと鳴る居間の額の裏から
行方不明の鞘が見つかる



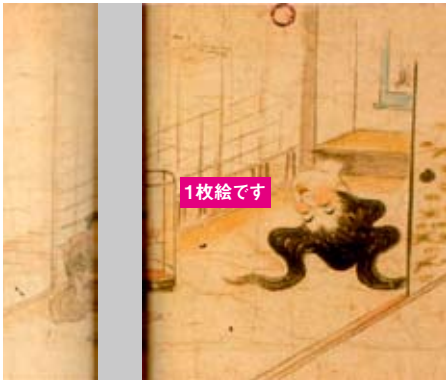
12日 押入の葛籠がひきがえるに化けて現れる



10日 知人の定八の頭から赤子が這い出してくる



6日 大きな老婆の顔が戸口をふさぐ



1枚絵です

6日 女の逆さ生首が平太郎をなめ回す



1枚絵です

1日 平太郎を襲う髭手の大男が現れる



『稲生物怪録絵巻』(堀田家本)。上巻・中巻・下巻の3巻からなり、7月1日から30日までの出来事を挿絵付で物語が綴られている。(三次市重要文化財)



子が出現。
11日：すり鉢とすりこぎが勝手に動き回る、たらいが女を追いつく。
12日：葛籠が化したひきがえるに。
13日：赤い石が飛来する。
14日：勝手に動く唐臼。巨大な老婆の顔が寝ている平太郎を舐め回す。
15日：「トントサココニ」と鳴る居間の額。部屋中がのり状態になる。
16日：串刺しの頭が現れる。
17日：漬物桶を運ぶ妖怪。文机が空中を飛び回る。
18日：畳が天井に括り上げられ、錫杖が飛び回る。
19日：罌をものもしない妖怪の魔力。仕掛けた罌がはずされる。
20日：ぼた餅を持参した美女の妖怪。
21日：読書中に現れた壁に映る人影。
22日：座敷を掃くシュロ箒。
23日：権八宅内をかき回す。泡を吹く巨大な蜂の巣が室内に現れる。
24日：大きな蝶が、数万の小蝶が室



太郎左衛門居申處(魔王)に、
右の槌のこし置候へば……

『稲生物怪録』(「いのうものけろく」と読む)は、寛延2年(1749)、備後三次を舞台に繰り広げられた、30日間にわたる妖怪の出現と数々の怪現象を綴った物語である。
現在、稲生物怪録は実に多くの種類が見つかっており、それぞれ内容も微妙に異なっている。それらは文章を中心とした書物類と、挿絵を用いた絵巻、絵本類の2系統に大別できる。稲生物怪録の原本は文章だけが書かれているが、そこに登場する妖怪達の姿を初めて描いたのが稲生物怪録絵巻(堀田家本)だ。この書の挿絵が模倣され世に広まっていく。

この物語は、江戸後期の国学者・平田篤胤の目にとまり、世に広く広まったとされている。それ以降も、泉鏡花や折口信夫、最近では水木しげる、荒俣宏、京極夏彦などによって取り上げられた。最近では宇河弘樹の漫画『朝霧の巫女』に登場し、若者たちの関心も高まっている。
奇怪な現象と妖怪が
平八郎を次々と襲う

物語に登場する妖怪を、時系列で追ってみよう。物語は、平太郎が一人で比熊山に登るところから始まり、5月26日に千畳敷で百物語する場面へと続く。そして、妖怪が現れる。7月1日：権八を襲うひとつ目小僧、平太郎を襲うひとつ目の髭毛妖怪。2日：行灯が燃え上がる、居間が水浸しになる。
3日：女の逆さ生首、居間に瓢箪がぶら下がる。
4日：紙が部屋中を舞う。
5日：目と足のある大石。
6日：戸口をふさぐ老婆の大顔。
7日：大坊主。
8日：塩俵が空を舞う。
9日：亮太夫に化ける妖怪。
10日：定八に化した男の頭から、赤

稲生物怪録の主人公である稲生武太夫は、本当に実在していたのだろうか。部太夫の足跡を訪ねると、その痕跡は広島市にあった。
武太夫は、享保17年(1732)、備後布野郷の農民だった武右衛門の長男として生まれ、幼名は平太郎。16歳で怪力を発揮、家督を継いだときには浅野藩主の吉長公より「御切米八石三人扶持」が与えられた。彼のところに妖怪が出現したのは、この頃のことである。
宝暦8年(1758)、「御白下え引越被仰付」となり、三次から広島へ出向く。50年余りを勤め享和3年(1803)12月20日、享年70歳でこの世を去った。稲生家代々の墓が

稲生武太夫は実在したのか、
その足跡を辿る

内を飛び回る。行灯が石塔に変化して燃え上がる。
25日：冷たい青入道が現れる。
26日：女の首が、平太郎を撫でる。
27日：昼が突如として闇となる。その夜、拍子木の音や女の笑い声が聞こえる。
28日：たくさん虚無僧が現れる。
29日：心地悪い風が吹き込む。
30日：山本五郎左衛門と名乗る武士に化した魔王が現れる。灰から現れた大ミミズと壁には目と口だけの妖怪。魔王に一カ月の様子を語る。平太郎の勇猛さに感服した魔王は木槌を与えて退散する。



30日 平太郎の勇気に感服した魔王は、自身を呼び出せるという木槌を平太郎に与え、
妖怪の担ぐ駕籠に乗って退散する



30日 武士に化した魔王に、1カ月の
子細を語る平太郎



30日 灰から這い出すミミズの妖怪、
目と口だけの妖怪



26日 飛んでいる女の首の下側が手となって
平太郎を撫で回す



25日 縁側の下に寝転ぶ青入道を踏みつけると
冷たかった



いのうぶだゆう

稲生武大夫の墓

稲生武大夫の墓は稲生家先祖代々とともに、広島市中区の本照寺にある。住職の寛(かけひ)義之氏によると、武大夫の墓は幾つかあるが、この墓が由緒正しいという。武大夫は宝暦8年(1758)御城下へ引越被仰付として三次から広島へと赴き、享和3年(1803)年12月20日、広島で病没した。

こくぜんじ

國前寺

國前寺は、広島市東区にある日蓮宗の古刹。日蓮の弟子日像に師事した晩忍が、歴応3年(1340)に開山した。30日間、妖怪に攻め続けられた平太郎(稲生武大夫)の勇猛さを知って感服した妖怪の頭の魔王が、平太郎に与えたという厄除の木槌が、当寺に安置されているという。



妖怪もののけの郷 三次のまちを歩く

中国山地のほぼ中央に位置する山間の三次市。市街地で西城川、馬洗川、吉田川の三川が合流し、江の川となつて流れ下る水の豊かな地域だ。三次の夏の風物詩は鮎の鵜飼である。夜、篝火を炊いた鵜飼いの船が西城川の川面に浮かび、幽玄な風情を醸し出している。

四方を山々に囲まれ、近くに大きな都市がないこともあって、三次の夜は暗い。この闇が、今も妖怪を生き残らせているのではないかと思うくらい漆黒の闇に包まれる。今も、闇の合間から妖怪たちがひょっこり現れてきそうな雰囲気さえ漂う。

稲生武太夫の屋敷は、比熊山の稜線が切れた平地にあった。今は広島国税局三次支部の近代的な建物が建っており、往事を偲ぶ面影はない。

標高340mの比熊山は、三次町から見ると、ハイキング程度にちょうど良い小山にしか見えない。しかし、登り始めるとつづら折りの山道が続いてけっこう辛い。

山頂へ至る道には八十八体の地藏観音が祀っており、霊場巡りをコンバクトにお参りすることができるようになっている。また、所々に稲生物怪録に登場する妖怪の姿をレリーフにして飾っている。地元民が造ったものだろうか、愛嬌のある表情をしたもの、おどろおどろしさがリア

いのうぶだゆう

稲生武大夫の碑

昭和3年(1928)に建立された稲生武大夫の碑は、稲生家の屋敷があった地(現在の三次市三次町)に建立されたとされているが、その真偽は定かになっていない。現存する稲生物怪の諸本には見られない、武大夫伝が記されている。

ある本照寺には、稲生太夫と刻まれた墓石もある。

稲生家の屋敷があった跡地(三次市三次町)に建立された『稲生武太夫碑』の裏面に刻まれた撰文によると、宗恒公から諸国を遍歴して武術修行をするよう命じられた。その道すがら妖しいことを鎮め、懲らしめたと記されている。

稲生物怪録の最後の場面にも出てくるが、平太郎は魔王から妖怪を鎮める霊力が備わった木槌を授かっている。各地でものけを鎮めていたのは、この木槌を使つてのことだろうか。その評判は近隣の諸藩にも伝わっていたという。そうした神がかり的な能力を持った武太夫ゆえ、広島市中区稲荷町の『稲生神社』の霊神として祀られている。

稲生神社は、元和5年(1619)年に浅野氏が広島入府の際に勧請した神社で、豊受大神、大國主命が祀られている。享保年間の広島大火災の折には稲生神社と世話をしていた大工の忠七の家が焼けずに残ったこ



「あの燈火、やけ候は、変化の業」と
「わが身へ火付くまで、うろたえ申間敷候」

ルに伝わってくるものなど、山登りで滅入った心を和ませる。

「比熊山もののけ登山道」と銘打って整備されているものの、案内標識が途中で切れており、目的の「たたり石」を見つけるまで幾度か道に迷ったりした。

山頂近くの道の脇に、突き出た岩があった。これが「神籠石こうごいし」、別名「たたり石」である。たたり石は御利益のある石として、地元の人々から崇拜されてきたが、同時に触るなとして、ないがしろにすると祟られるという恐ろしい言い伝えも併せ持つ。三次市歴史民俗資料館の学芸員渡邊氏に、たたり石の話を尋ねると、「確かに、そういう言い伝えはありますが、あの石に触れて祟られたとか、亡くなったという話は聞いたことがありません。どうぞ触って来てください」という答えが返ってきた。実際、その前に立った時、普段は言い伝えや迷信など信じぬつもりでいながら、なぜか触れない。また、触りたくもない。「触らぬ神に



いなりじんじや

稲生神社

稲生と書いて「いなり」と読む。神社広島市南区稲荷町のオフィスビルに囲まれるようにあり、霊神に稲生武大夫が祀られている。地名からも推測されるところ、もとは五穀豊穡、商売繁盛の稲荷神社だったと考えられるが、稲生物怪録の武大夫が魔王から授かった木槌の霊力にあやかり魔除け、厄除けの神様としても崇敬されている。



稲生家の『稲生家武左衛門正信先祖由緒書 並 畧系図』。主人公の平太郎(稲生武大夫)の名も記されている。





たたり石

比熊山の頂付近には「神籠石（こうごいし）」と呼ばれる大岩があり、古くから神様が宿る石として崇拝されてきた。転じてこの石は触れるとたたりがあるとされ、別名「たたり石」とも呼ばれている。武大夫は千疊敷で百物語をした後、この石に木札を結んだという。

崇り無し」と独り言を言いつつ、早々にその場を立ち去る――。

比熊山から下山し、麓の寺を巡ってみる。山麓の東南に位置する「西江寺」、南麓の「鳳源寺」、「妙栄寺」が並ぶ。稲生物怪録の舞台になっているのが西江寺である。また、その東側に位置する太歳神社は、三次町の氏神として古くから信仰を集めているが、物語の中でも妖怪が退散した後、平太郎たちは氏神様にお礼参りをし、そこで物語は終わる。

どこか憎めない 物怪録の妖怪達

稲生物怪録に登場する妖怪達や奇怪な現象を見ると、不思議と恐怖という感覚を覚えない。それは、日本の妖怪に共通する概念なのかもしれないが、「脅かしはするが命を取らない」のだ。

西洋の妖怪達は、ドラキュラや狼男のように、人間に直接襲いかかって命を奪う。それとは、正反対に日本の妖怪達は、幻影となって現れ人心を惑わせるだけで、直接的な被害を与えることは少ない。

稲生物怪録の平太郎も30日間、妖怪や奇怪な現象に悩まされるものの命の危険にさらされたわけではない。そして、30日間脅し続けた妖怪の方が降参して、自らを呼び出して他の妖怪退治に役立ててくれと、木槌まで与えていく始末である。一見すると、恐ろしいようにも見える日本の

妖怪たちだが、どこか憎めない愛嬌のようなものを秘めている。例えば、20日にやってきた妖怪は、ぼた餅を持参する美女である。突然、ぼた餅を持って美女に訪ねられれば驚くであらうし、我が家においても在所を失うに違いない。また、26日にやってくる女の首の妖怪もそうである。ただ、首だけなら恐ろしやで済むのに、ご丁寧にも首の根元から手が伸びてきて体を撫で回すとなると、いささか滑稽にも見えてくる。

今を去ることおよそ270年前、中国山地の山間で誕生した稲生物怪録は、口伝や写本によって広く全国



大成る岩、御座候。それへ
あたり候へば、即死いたし……



三次町の街並み

三吉氏の城下として栄えた三次町は、西城川と江の川に囲まれた輪中の中に往事の町割が今もそのままに残され、比熊山からは情緒豊かな街並みを一望することができる。



30日もの間、妖怪との戦いに耐え抜いた稲生平太郎は、妖怪の頭目である山本五左衛門から木槌を受け取り、比熊山山麓の西覚寺へお礼参りに出かけた。そこで札を拝受して、木槌同様家系の守りとした。

へと広まり、近頃ではマンガにもたびたび登場するほど、長年人々に愛され続けている。この物語に登場するのは、どこか愛らしくて憎めない妖怪達であり、平太郎が武力をもって妖怪退治をしたのではなく、生活の中でそれを受け入れていたため、妖怪はたまたらず退散してしまっただけという極めて平和な物語である。奇異なものを奇異なものとしていたずらに敵対するのではなく、寛容をもって受け入れる広い心と強靱な胆力を持ち合わせる大切。稲生物怪録は、私たちにそう語りかけているのかもしれない。

